

新潟福祉文化を考える会現場セミナー自主研修会

「地域(子ども)食堂立ち上げ研修会に参加して」

関矢 秀幸

(新潟福祉文化を考える会 前日本福祉文化学会北陸ブロック理事)

(初めてのオンライン研修会)

今回の研修会は、魚沼市社会福祉協議会と新潟県社会福祉協議会の主催で開催されたものである。当初、会場での参加聴講を申し込んでいたが、魚沼地域の市民の関心が高く、予定していた100名を超えたため、市外の参加希望者は、WEB配信に回ることとなった。

我々も折角の機会であることから、五十嵐真一理事、五十嵐勝氏、そして私の3名で、五十嵐勝氏宅でオンライン研修会を受講することとした。用意した39インチの大型テレビにパソコンをつなぎ、音量も大きめにして会場内の雰囲気を出し、資料については事前にHPに添付されて資料を印刷し、右手に筆記用具、左手に軽食や飲み物を持ち、ゆったりと研修会を受講した。

(子どもたちは何を食べたか?ではなく誰と食べたか?)

基調講演は、湯浅誠氏(東京大学先端技術研究センター特任教授。全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長)であった。

私は社会福祉協議会の職員であり以前は地域福祉を担当していたため、今回の研修を聴き、昭和61年に立ち上げた「地域給食ボランティア(市内15地区)」を思い出した。主な構成は、当該地区の婦人会、民生委員、健康推進員、食生活改善推進員、公民館の調理クラブの面々であった。当時は、独居高齢者が増加し、見守り体制としての施策が社会福祉協議会として急務となっていた。その対応として、①安否確認ふれあい訪問②高齢者(独居老人)昼食招待会が各地区で実施されていた。年数回の会食であるが、実施するに従い、地域の婦人会の慰問、民生委員との懇談、時には地域の子どもたちと一緒に会食の機会もあった。今から思うと、「子ども食堂」の基礎が全国的にできていたのかもしれない。やはり、会食は一人で食べる孤食でなく、誰と食べたかそして、何につながり、住んでいてよかったと思う安心安全の地域ができるのかと、地域民と一緒に考える地域福祉の原点であったと思われる。

(子ども食堂のルーツ)

東京都大田区蓮沼の「気まぐれ食堂だんだん」(代表近藤博子氏)がルーツと言われている。きっかけは、2010年ころ、たまたま卵を買いに来た小学校の副校長先生から「今年入学した子の中に、お母さんが精神的な病気を抱えていて、お昼の給食以外の朝食と夕食は毎日

バナナ一本しか食べられない子どもがいる。」と聞いてショックを受けたこと。飽食の日本で満足に食事ができない子どもがいるなんて、信じられない、なぜそういうことが起きるのかと思い、自分の店には、野菜や米などの食材、調味料はそろっている。元居酒屋だから厨房もある。しかし、なかなか決断が出来ずにいたところ「その子どもは養護施設に行くことになった」と聞かされて、何もしてあげられなかった悔しさがつのり、「すぐ始めよう、カレーでもいいじゃないの」と2012年8月に子ども食堂が始まった。

(地域の文化センター(公民館)、サロンの役割)

当初は全国で、100ヶ所にも満たなかった子ども食堂であったが、毎年1200ヶ所前後の増加を続け、2020年には4,960ヶ所に上ったとのことである。前述した「高齢者昼食招待会」のように、自然発生的に、「子ども食堂」との合流に繋がり、今では地域によっては、「地域食堂」「たすけあい食堂」「みんなの食堂」など、子どもだけでなく、大人や高齢者も参加する食堂が出来てきた。「子ども食堂」は、孤食を防ぐだけにとどまらず、いろいろな問題を解決する、社会的な運動に広がっている。①子どもたちがボランティアの大学生に勉強を見てもらったり、②高齢者が子どもたちと遊んだり、③大人も子どもと一緒に学べる場、地域のサロンとして機能している。まさに多世代交流の場になっている。孤食が寂しいのは子どもだけではない。子どもと大人が触れ合える場所が「子ども食堂」である。家族ではないが、大人は子どもと食事を楽しみ、勉強を教えることもある。大人も子どもも「自分の居場所」と感じてもらえる場所である。

※一口メモ～児童クラブでは、支援員が子どもたちに対して、宿題の見守りはできるが、勉強を教えることはできない。よって、ここに両者の違いがある。

(価値は多世代交流にあり)

講師は多世代交流とは①にぎわいづくり地域活性化②孤食対応③貧困の連鎖を断ち切る④高齢者の健康づくり⑤子育て支援虐待予防をあてている。

お寺での取り組みは個人的には興味深い。私の地区でも寺院を利用した「子ども食堂」も立ち上げられている。今回の研修は、ご近所同士が助け合うお互い様の精神を見直す機会となった。

さて、実践報告については、五十嵐真一理事に委ねたい。今回の研修終了後は、この魚沼地域において、複数の立ち上げ希望者が手をあげると思われる。

第2部

五十嵐 真一

(日本福祉文化学会北陸ブロック担当理事)

【シンポジウム】

湯浅 誠氏の基調講演を受け、引き続き同氏がコーディネーターを務めるシンポジウムが開催された。県内で先進的に活動している3箇所の「食堂」代表者である3氏が各「食堂」の、①趣旨及び内容②ターゲットとする参加対象③企画担当者・チームから地域住民やこれから「食堂」を運営したいと考えている参加者へのメッセージなどを中心に実践報告を行った。以下にその概要を報告します。

なお、当学会の広報委員会担当の稲田泰紀理事が、ボランティアとして活動している、つばめ地域食堂（地域食堂プロジェクト）の実践報告を行っています。

【実践報告】

★そらいろ子ども食堂（新潟青陵大学・新潟県立大学有志）代表 松澤 果奈氏

- 学生主体で運営する新潟県内唯一の子ども食堂で2016年2月新潟市において活動開始。
- タテでもヨコでもないナナメの関係（子どもにとって普通の少し上のお兄さん、お姉さんのようなスタンス）を活かして子供たちや保護者と関わっている。
- 地域の中で誰もが過ごすことのできる温かい居場所をつくること、困っていると言えない人たちの力になること、年代や学校を越えて様々な人たちと関わる機会をつくることを理念として活動している。コロナ禍の現在は、会食から配食に変更し、SNSの強化・更新（好評だった食事のレシピ及び家の中でできる遊びの配信）、対面会食再開の準備を行っている。授業や実習等、学業との両立や後輩への引継など、学生主体だからこそその課題もあるが、寄付していただく方々や地域の方々など様々な人の協力を得て対応している。
- 現在の活動概要 毎月2回食材配布、構成員21人（アドバイザー教員3人のほか、2大学、1短大の学生18人）で運営、8月に「そらいろ縁日」を開催するなど、子ども達に楽しんでもらうためのイベントなども実施する。

★ 新町みんな食堂（新町みんな食堂世話人会） 世話人代表 佐竹 直子氏

- 長岡市初となる子ども食堂。御自身が認定こども園の園長となったときに、前職（子育て支援のNPO）では出会ったことのないような家庭環境を知り、「食堂」の必要性を強く感じた。しかし、当初自分にはできないとの思いがあり動けなかった。ところが、ある子

ども食堂の運営を実際に見学したことにより、こういう感じで緩やかにやれるなら自分にもできそうと感じ、当時メンバーだった放課後子ども教室の仲間に相談し、2017年

2月に設立し、地域の方10人程の世話人会及び調理受付ボランティア25人登録で運営を始める。連絡等は2系統のグループLINEを利用していた。

- 自分でもできると思ったポイントは、見学した「食堂」は、きちんとした厨房がない所だったが、立派な食事というより心温まる「暖かい」食事だったからとのこと。
- 世代を問わず孤食を防ぐ・フードロスをなくす・ワンオペ育児をしている保護者支援・自己有用感の醸成等々の活動目的の一つに「災害時に機能する緩やかな繋がり」と炊き出し訓練」というのがあり、ユニークな感じがするが、中越地震を経験したときに避難所で子ども達の居場所がなく、隅に追いやられている現状を見て心が痛んだ経験上、普段から繋がっていなければ、いざというときに繋がることはできないと気づいた。そして「年1回の炊き出し訓練」で十分ではなく、日常的に行っているからこそ、非常時に役立つと考えて決めたという。普段から顔が見え、名前のわかる関係づくりを大切にしたいとの強い思いがみえた。御自身の震災体験や子育ての経験から実感のこもった報告だった。
- コロナ禍では、2020年3月に学校が休校になると、お弁当での配食に切り換え、学校の長期休校に対応し、春休み中の回数を増やしたり、地域の方々の協力のもと、子供たちの遊び場(蔵王の城プレーパーク)を作って山羊を飼ったり、ザリガニ釣りをしたりし、「食堂」と同時開催した。美味しかったから作り方を教えてと聞かれた食事等についてSNSを利用し、配信(「みっちゃんの2分クッキング」)も行う。
- 現在活動概要 月1回みんな食堂の日開催、料金は1食100円、食数200食(コロナ前は50食~100食)

★ つばめ地域食堂プロジェクト~食事がつなぐ地域の輪~) 稲田 泰紀氏

○ 燕市内に2017年3月開設された「食堂」で、職場の業務としてではなく、個人のボランティア活動として、協力者と共に「食堂」を運営している。子どもだけでなく、地域交流の場として『食を通じた地域づくり』の視点・思いから、地域食堂としている。

○ 貧困対策としての側面だけではなく、子どもや親、地域とのつながりが薄れることに起因する悲惨な事件や事故を心配し、この活動を続けている。「食堂」は、子ども達の笑顔を守り、大人たちも元気を貰って『地域』を豊かにしていこうというお互い様の活動と考えている。参加費は子どももおとなも無料、誰でも参加可能、40~80人、スタッフは学生・地域住民10人程度。

○ 子どもの「食」を入り口に地域で支え、地域を育てることを目標にし、大きな柱は、①

ひとり親、共働き親の支援②子どもの安全を地域で支える③みんなでワイワイ食事する。
④学び（学習支援・遊び）⑤地域の居場所⑥地域づくり（体験を通じて子どもも大人も参加するという意味で）

- 特徴としては、多世代交流、地域とのつながり、経験を積む場を目的とし、希望する誰もが参加できるオープン型（上記）の他、個別支援の場、保護者のレスパイト（お休みする場）を目的に、対象者を限定した子ども食堂（クローズ型）を開催していることである。こちらは、対象を『ひとり親家庭』に限定して、子ども食堂に併せて学習支援も開催している。（概ね月1回程度、園児から高校生、専門学校生、平均5組・10～15人程度参加、参加費無料、スタッフ5人程度で対応）
- 2つの「食堂」を運営する、子ども食堂の多様性の一端を示した活動となっている。

【会場との質疑応答】

1部及び2部が終了した後、会場との質疑応答となった。主なものを記載する。

問 オープン型だと、参加人数がどのくらいになるかわからないので、準備はどうするのか？

答① 定員を超えて参加者があった場合は、後から来た人にもメニューを変えて提供する。おにぎりを多めに作って、お弁当ではないけどと、少し多めにお渡しするなどして、何もないということはしない。

答② 最初は人数が読めないが、やっているうちにだんだんと読めるようになっていく。

問 食事を作る人の代表は、調理師免許が必要か？

答 子ども食堂、一人暮らし高齢者の食事会や弁当を届けるようなときは、厚労省から指針・ガイドラインのようなものが出ていて、調理師免許は必要としない。ただし、食中毒等、衛生問題には気を付けるようにしてくださいとの指導はある。調理師免許がなくても作られる活動になっている。

問 参加する人の中で問題行動やトラブルを起こす人が来たりしないか？

答 問題行動という人はなかったが、以前、虐待ではないかとの疑いがあるケースを見たことがある。そういう場合は、「食堂」開催の翌日以降に保健師に情報提供という形で連絡を入れさせていただくようにしている。お子さんに障害がある場合は「食堂」内で話し合っておくことで「食堂」内部で、あるいは子ども達のグループの中で解決できている。